

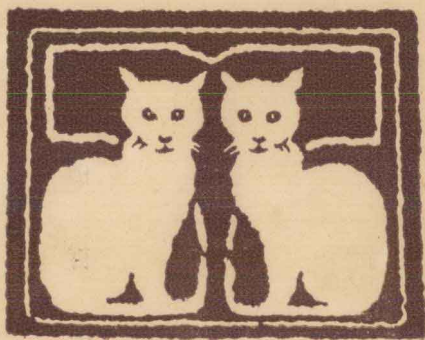


適

贗作

吾輩は猫である

内田百閒



新潮社版

昭和二十五年四月一日 印刷  
昭和二十五年四月五日 發行

定價 貳百七拾圓

地方  
實價 貳百八拾圓

著 者 內 田 百 閒

東京都新宿區矢來町七十一番地

發 行 者 佐 藤 義 夫

東京都新宿區矢來町七十一番地

發 行 所 株式會社 新 潮 社

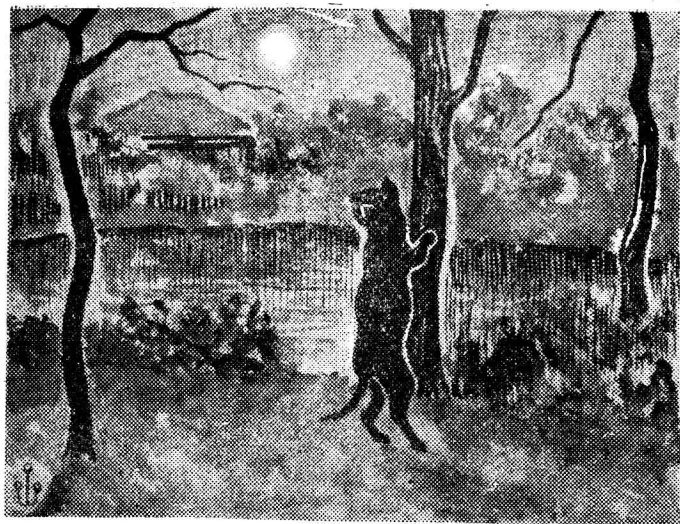
電話九段(33) 一三番 一四番  
振替東京八〇八番

吾輩は猫である 賈作

塚 田 印 刷

贗作吾輩は猫である





## 第一

烏の勘公が行水を使つたり、水葵を喰ひ散らしたりした水薺<sup>みづがめ</sup>におつこちて、吾輩はもう駄目だと思つたから、天璋院様の御祐筆の妹のお嫁に行つた先のおつかさんの甥の娘だと云ふ二絃琴のお師匠さんの許<sup>きこ</sup>の三毛子の法事に聞き覺えた南無阿彌陀佛を唱へて、薺<sup>かめ</sup>の縁を無闇にかり引つ搔くのを止めたのだが、猫と雖も麥酒を飲めば酔つ拂ひ、飲んで時がたてば酔ひはさめる。どのくらゐの時が過

ぎたか、歲月が流れたか、變轉極まりなき猫の目を閉ぢて甕の中に一睡した間の事は知らないが、氣がついて甕の縁から這ひ上がり、先づ身ぶるひをして、八萬八千八百八十本の毛についた事を拂ひ落とした。

矢つ張り晩の樣で向うの方に大きなお月様が懸かつてゐる。これから昇つて行くところなのだらう。甕に這入る前には、お月様今晚はと云ひたい樣だつたが、今は毛頭そんな氣持はない。いやに光りがなくて、のつぺりして、月には毛が生えてゐない。人間の顔とおんなじ様な片輪だ。毛のない物を見ると、にがにがしい氣がする。月に背そむいて歩き出したら、身體を動かした途端に咽喉の奥からかすかな麥酒のげつぷが出た。

向うに大きな池がある。似た様な景色だ。池を左に廻つて、板屏の穴から手近かの家の中へもぐり込んだ。苦沙彌くしゃみ先生の家よりは小さい樣だが、兎に角落ちつく所を見つけなければならぬ。細戸に開あいてゐた障子の隙間から座敷に上がり込んで邊りを物色する。間境の襖が少し開いて明かりが洩れてゐるから、その間に前脚を入れて吾輩が這入るだけ襖を開けた。こんな藝當はお茶の子である。

開けた所は茶の間で、柱の前に五分刈頭の大入道がきちんと坐つてゐた。鼻の下に白髪まじりの口髭を生やして何かぶつぶつ獨り言を云つてた樣だが、吾輩が黙つて這ひ込んだのを見て、

髭栗頭の毛を一本立ちにした様な顔になった。季節外れのハノ字髭なんかおつばやかして大層もない顔をしてゐる癖に、この大入道は案外小心なのかも知れない。身動きもしないで、ちつと吾輩の方を見つめたまま、小さな聲で、

「しつ」と云つた。初對面に黙つてゐても悪いから、吾輩も靜かに一言「にやあ」と奏して應へておいた。

大入道が吾輩から目を離さずに、口の中で「おいおい」と云つた。するとお勝手と思はれる方で返事の聲がしてそちの襖から小さなお神さんが顔をのぞけた。お神さんではない。大入道が口髭を生やかしてゐるくらゐだから奥様なのだらう。しかし吾輩が人間社會に伍して得た經驗から判斷するに、大入道の鼻下髭に拘らず、お神さんを以つて稱し遇するのが適切であつて、奥様と云つては失禮に當たる底の婦人である様だ。

「おや」と云つて立ち竦んだ。

「あらいやだ。猫が。何でせう」

「自分で襖を開けて這入つて來た」

「まあ。年を食つてゐるんだわ、きつと。でも器量よしね、この猫は。尾つぽもちやんとしてゐるし」

新道の二絃琴のお師匠さんや、その家の女中から、吾輩は教師のとの碌でなしの野良猫と罵られ通して、承服したわけではないが、自己の容色に就いて自負すると云ふ氣持はなかつた。はからざりき、大入道の小さなお神さんに百年の知己を得んとは。

「つまみ出してしまへ」

「さうね、でもかうして自分で這入つて來たのでせう。鼠の穴をいくらふさげても、ふさげてもどこかから這入つて來て、昨夜も人參の胴中に穴をあけたわ。置いてやりませうよ。きつと鼠が出なくなるから」

「家の中をのそのそ歩き廻つて、勝手に襖を開けたり閉めたりしやしないか」

「まさか。襖を開ける事は知つてゐても、後を閉める事はしませんよ。猫が――そんな事をした日にや、をかしなものね」

「開けつ放しで家の中を横行<sup>くわつぱ</sup>闊歩させるのか」

「いいわ、あたしが後から閉めて廻るから」

大入道が未だ吾輩を飼つてもいいと、はつきり云はない内に、已に吾輩の入籍は認められた様な形勢になつて來た。有り難いからお神さんの膝に近づき、少しく咽喉を鳴らした。お神さんは吾輩の頭を軽く叩いて、もう一度、「ほんとに器量よしの猫だわ」と云つた。

それから片手を吾輩の頭に載せたまま、

「もうお膳を出してもいいんでしょ」と大入道に聞いた。

「いい」

驚いた事には、この時間になつてまだ晩飯の前らしい。苦沙彌先生の家では思ひも寄らぬ事である。しかし今の吾輩にその方が好都合な事は云ふ迄もない。

柱に<sup>もた</sup>靠れた大入道の前にちやぶ臺を置き、お神さんがお勝手からいろんな物を運んで來た。

吾輩はうるさくない潮合ひを心得て、狭い家の中を行つたり來たりするその足許について廻つた。一通り小鉢や皿や小井に盛つた物を出し終つて、お銚子を添へ、お勝手に戻つて鐵瓶に次の爛徳利をつけてから、「缺けたお皿はなかつたか知ら」とお神さんが獨り言を云つた。吾輩はつつましくにやあと一聲鳴いて邪廳にならぬ隅つこの方に坐つてゐる。

臺所戸棚の奥をがたがた云はせて、お神さんは藍模様の大きな皿を取り出した。成る程、縁が缺けてゐる。その上に麥の澤山混じつた御飯を盛り、上から鍋の底に残つた汁を掛け、紙袋に手を突込んで煮干しを五六匹摘み出してその上に振り掛けた。吾輩は咽喉が鳴り涎が垂れる様であつたが、何しろ初めての家であり、ここが我慢の仕所と觀念してちつとお神さんの手許を見つめてゐる。

「おや、出来過ぎたか知ら」

吾輩に供せられる計りになつてゐるお皿をその儘にして、鐵瓶から爛德利を引き上げ、指先で濡れた徳利の尻を撫でてゐる。その上の苦沙彌家では見た事のない光景である。布巾で濡れた爛德利の肌を拭き拭き茶の間の方へ持つて行つた。後には煮干しの掛かつたうまさうな御飯が吾輩の鼻の先に置きつ放しになつてゐる。つらつら思ふに、吾輩も勘公の廻入りを境として随分と劫を経たものである。昔、寒月君が椎茸を食つて前歯を缺いたお正月に苦沙彌先生の家へ年賀に来て、出された口取りの蒲鉾を椎茸で缺けた前歯で半分食ひ切つた。後の残りの半分は後刻吾輩が失敬して竊かに頂戴したのを思ひ出す。その翌くる日は苦沙彌先生の食べ残したお雑煮の椀の底にくつついてゐた餅にうつかり齒を立てて七顛八倒の苦しみを嘗め、家ぢゆうの笑ひものになつた。今かうして目の前に、鼻の先に吾輩が頂戴するときまつてゐる盛餐が据ゑられてあつても、一言お神さんから、さあどうぞと云ふ挨拶を受けない限り、吾輩は手を出さないのである。

お神さんはすぐに茶の間から戻つて來たが、手にはさつきのお銚子を持つてゐる。そこに置いた音を聞くと、空つぽの様だ。今の間に大入道は一人で已に一本あけてしまつたのか知ら。按ずるに大入道は相當の酒呑みである。吾輩が廻入りの前に積んだ人間社會の経験の中には然

る可き酔つ拂ひはゐなかつた。この様子では當分の間少少勝手が違ふ思ひをしなければならぬかも知れない。

「おや、お前さんまだ食べないのかい」とお神さんが云つた。お前さんなんて呼ばれて、吾輩却つて忤怩たるものがある。「お行儀のいい猫だわ。それとも食べたくないのか知ら」

場敷を踏み、劫を経た自制心で差し控へてゐるものを、食べたくないのかとは聞こえませぬお神さんだ。怨嗟を籠めて、にやあと一聲奏しておいた。

「さうさう、まだあれが有つたつけ」と口の内云ひながら、お神さんはかますの干物の頭を二つ取り出して、藍模様のお皿の御飯に載せてくれた。

「さあさあお上がり、お待ち遠さま」と云つた。苦沙彌先生の奥さん、即ち珍苦沙の細君とは餘程調子が違ふ。さて、試に口をつけて見るに、小さいながらも尾頭つきの煮干し、かますの頭は云ふ迄もなく吾輩に取つて大牢の滋味であるが、さつきお神さんが鍋の底から御飯の上に掛けた汁のうまい事、その風味は何にたとへる物もない。味は雞肉の出しであるが、その奥にもう一つ吾輩の味覺の記憶にない所がある。有りつたけ舌を伸ばして、べちやべちやと舐め且つ食つた。腹がふくれるに従ひ、ほのぼのとした氣持になつた。持つて廻らずに云つて仕舞ふが、酒を使つて雞を煮たのである。煮汁に酒の氣のある物なぞ甕入り前の吾輩は想像した事も

ない。

吾輩にその御馳走を當てがつておいて、お神さんは茶の間へ行つた。猫たるの身分上、獨り喰ひのうまさと云ふ事には馴れてゐるが、今晚はまた一しほやれた。煮干しは云ふ迄もなく、かますの頭の骨も綺麗に食べ盡くし、お皿についた汁を丹念に舐めて、拭いた様にしておいた。後で更めて吾輩の食器を洗はなくてもいい。親切なお神さんに對する猫としての内助の一端である。

さつき見たところでは、今晚はいいお月夜の様であつたし、外はまだそれ程寒いと云ふ時候でもない。食後の散歩にそこいらを一廻りして來たいところだが、何分まだ勝手の知れない所ではあり、又吾輩が出て行つた爲にお神さんや大入道が勘違ひして、折角來た器量よしの猫がもう行つてしまつたかと思はれては困る。今夜に限つた月夜でもないから、散歩は思ひ止まつて、大入道の酒盛りの模様でも見學しておかうときめた。丁度三本目のお銚子を取りに來たお神さんの足許について茶の間へ這入つた。

大入道は一人で注いで酒を飲んでゐる。時時お神さんが注いでやる。お酌を受けるとか、獨酌で傾けるとか云ふ所なのだが、何れにしても吾輩の見馴れない光景である。大入道の顔に、いくらか照りが出てゐると云ふ程度で、已に大分飲んでゐるらしいのに素知らぬ様子である。

杯の合ひ間にちやぶ臺の上の物を何か知ら食べてゐる。どんな物が列んでゐるのか、後學の爲に見ておかうと思つて、靜かに、しとやかに大入道の膝の上へ上がつて行つたら、まだ上がり切らぬ内にひどい勢ではね落とされた。あやふく前脚の爪が出て大入道の膝頭を引つ掛けるところであつたが、吾輩自身の判斷で事無きを得た。苦沙彌先生の膝にはしよつちゆう乗つてゐたものだが、矢つ張り工合が違ふ。

「お出で」とお神さんが云つて、吾輩を自分の膝の脇に引き寄せ、軽く頭を叩いてくれた。その位置から更めて大入道の手許を眺める。小さく切つたチーズの切れがあるらしい。箸の先にそれを取つて、食べるのかと思ふと、別の手で焼き海苔の切つたのを摘んで、くるくる巻いて、チーズの海苔巻きを拵へた。それを更めて箸に挟み、先に一寸醬油をつけてから口へ持つて行つた。をかしな事をする大入道もあつたものだ。吾輩が見てゐて、チーズはうまさうだと思ふ。しかし海苔は甚だ始末の悪い食物である。猫の上顎に海苔が貼りついた時の處置は困難である。お雑煮の餅を食つた程の事ではなかつたが、吾輩の海苔の思ひ出はよろしくない。考へても上顎の裏がくすぐつたい。

表の戸が聞く音がした。苦沙彌先生の家の様に、ちりちりちりと鳴る仕掛けはなささうだ。御免なさいと云つたのだらう。何だか風のような聲がした。

お神さんが起つて行つて、すぐに引き返し、

「風船さんですよ」と言つた。

吾輩は玄關へ出ないで、もとの所に残つてゐたが、大入道の顔を見てゐると、その聲を聞いた途端に陽氣な色が射した様だ。

「どうぞ」と大入道がどなる聲につれてそこへ現はれたのは、痩せこけて、しなびて、ばさばさに乾いて、かますの干物を突つ立てた様な姿をした中年の男子である。

「やあやあ、これはこれは、ようこそ風船畫伯<sup>けいふく</sup>貌<sup>がた</sup>下」と大入道が云つた。口を利けば酔つ拂つてゐる。だれも來なければ内攻してしまふ所だらう。

「遅く伺つて相濟みませんが、又先生さんにお願ひの筋がありました」

おやおや、大入道の事を先生と云つた様だ。苦沙彌が教師で先生だつた流れを汲んで、大入道も教師なのか。それとも易者が辯護士か揉み療治か、まだその正體を窺<sup>うかが</sup>ひにしないが、おまけに、先生にさんをつけて、先生さんと云つた。

「何の筋でも、よく入らつしやいました。筋は後で引つ張るとして、さあ先づ一獻<sup>いけん</sup>」と大入道が杯を差した。「初めは馳けつけ三杯でお行きなさい」

「ところが先生さん、今日はまた朝來一粒一滴もと云ふ所なのでして」

「おや。それはいけない。風船の繫留索が切れましたか」

「先日から切れて居りまして。はい。相済みません」

さう云つてうまさうに酒を飲み出した。

風船畫伯の爲に新たに杯と小皿を載せた盆を持つて座に戻つたお神さんに、大入道が云つた。

「おい、風船さんは、また一粒一滴だとさ」

「おや、そりやいけないわ」とお神さんが眞剣な顔をした。

「だから大急ぎで、即席のお吸物をつくれ。初めはお酒と吸物で、流動物からだ」

大入道が云ひ終らない内に、お神さんはもうそこにゐなかつた。

「お騒がせして済みません。しかし、もう馴れて居りますので」

「さうだな、その點は信賴出来る。しかしどうしたのです」

「雑誌のカットを描いて居りましてね。そつちの手違ひで繫留索が切れました」

忽ち吸物が出来て来て、風船畫伯はうまさうに啜つてゐる。中身が何だか吾輩には解らなかつたが、話の節節で葛を入れ生姜を溶かした掻き玉だつた事を推斷した。少少浦山敷い様だが生姜は御免を蒙りたい。しかし何人も吾輩に薦めてゐるわけではないから、この穿鑿は止めよう。

お酒が廻つて風船畫伯の貧弱な聲に張りが出て來た。大入道が酒の勢ひで捕つて喰ひさうな調子だつたのに對し、立ちなほつた形勢である。

「風船さん、これをお上がんなさい」

「何で御座いますか」

「防風です。防風の根の油あぶら痛めです」

「ばうふうと申しますと」

「そらお刺身のつまにつける濱防風、あの根を痛めたのです」

「どんな字を書きますか」

「消防自動車の防と、中風卒中の風です」

「ははあ、さう致しますると、これはお藥ですか」

「藥にもなる様だが、八百屋ではこの根を棄ててしまふのだから、勿體ないから、かうして食べるのです。うまいでせう」

「おいしう御座います。何だか、またたびを聯想しました」

「またたびとは變だな。なぜです」

「この味は、いや味ではない、味はひだ。この味はひは、三ツ葉の根に似て居りますでせう。」